

クラスの中に治療的人間関係をーその2ー

萩 昌子（大阪）

要旨

キーワード：

はじめに

私は教育研究所で、問題行動を示す児童・生徒の指導について先生方から相談を受けています。学校から勧められて保護者が相談に来られることが多いのですが、どんな場合にも保護者の協力が得られるわけではありません。

保護者が相談を希望するか否かは、ひとつには、問題と言われている行動の出現状況にかかわりがあると筆者は考えます。問題行動が学校場面にのみ出現し家庭では見られない場合、あるいは、問題行動と同様の行動が家庭内ではさほど深刻な問題とはならない場合、保護者は相談に行く必要を感じないかもしれません。

もうひとつには、保護者の育児および生活の信条にかかわる要素があります。

たとえば、子どもが悪いことをした時には、体罰さえ辞さないといったたいへんきびしいやり方を、育児方針とされている保護者もおられるでしょう。また、わが子をかかわく思うあまり、自分の子どもを責めるより担任やクラスメートに原因を見いだそうとする保護者もおられることでしょう。問題となる行動が家庭で出現していても、保護者が育児方針を変える必要があると感じるようになるまでには時間がかかる場合もあります。

なんらかの理由で保護者の協力が得られない場合でも、学校の先生方は児童・生徒の問題行動に対処していかなければなりません。運よく保護者の協力が得られた場合にも、学校においても効果的な指導をするという教師の仕事がなくなるわけではありません。クラス内での指導方法について、担任の先生と相談を進めた2つの事例を通して報告したいと思います。

事例1：カッとなると暴れ、クラスメートを傷つけるKくん（小学校4年生男子）

6月中旬、学校より相談の申し込みがありました。

些細なことでカッとなり、物を投げ、暴れる。友だちをけがさせるので困っているということでした。担任のS先生は、「夏休みに入ってから、時間をとってゆっくり相談したい」との意向をお持ちでした。筆者が、学校を訪問しKくんを観察しておきたいとの希望を伝えたところ、S先生は快く了承してくださいました。また、問題行動を具体的に記録しておいていただくこともお願いしました。

(7月13日) 学校訪問し、行動観察をしました。

授業場面：S先生と筆者が教室に行くと、Kくんは教卓の前の床にわき腹と背中を痛そうに押さえて横になっている。休み時間にトラブルがあったらしい。授業開始前に、男子と先生とがKくんを抱えるようにして彼の机のところまで連れていく。Kくんは床に横になったままである。先生が座るように促すが、Kくんは立とうとしない。

先生が授業の合間に再度Kくんのところに行き、座るように声をかける。けれどもKくんは動こうとしない。先生がしゃがんで「どうしたんや？」と問いかけると、Kくんは「～くんにやられた…」というようなことをボソボソと訴える。先生が「そう…。だいじょうぶ？ 座れるかな？」と言いながらKくんを起こすと、Kくんはいすにこしかけ、勉強を始める。その後は授業に参加する。

給食場面：Kくんは当番ではなさそうだが、ドレッシングのふたを開け野菜にかける。そのほかは、ウロウロと歩き回っている。着席していないためか、Kくんの机には給食が配られていない。そのことに気づいたKくんは「ない」と言いに行き、当番の子に用意してもらおう。ほかの子どもたちは机の向きを変え、向かい合って座っている。Kくんは机を前に向けたままで食べ始める。筆者はKくんと同じグループに入れてもらい、次のような会話をする。

筆者「いつも前向いて食べるの？」

K 「うん。時々。週に一回、横向く。そう決めてんねん」

筆者「他にも決めてることあるの？」

K 「なに？」

筆者「例えば、宿題はしないとか、忘れ物をするとか・・・」

K 「宿題はする。時々、して来ない。やるけど途中で寝てしまうねん。そしたら、お母さんが布団を敷いて、お父さんが帰ってきたらぼくの背中を押して、ぼくはふとんの上にコロんと転がるねん」

筆者「へえー。転がっちゃうのか。お風呂入りなさいとか、歯磨きしなさいとか言われないの？」

K 「弟、おもしろいねんで」

筆者「どんなふうにおもしろいの？」

K 「お風呂に入ったら、『かき氷ちょうだい！』って言うねん」

筆者「そしたら、もらえるの？」

K 「うん」

筆者「ぼくはどうするの？」

K 「ぼくはジュースでがまんする」

筆者「そう、がまんするの。弟とけんかする？」

K 「するよ」

筆者「どんなけんかするのかな？」

K 「弟な、お母さんが子ども会へ行ってる時、ご飯食べんとテレビ見てばかりやったら、(ぼくが) テレビ消すねん。(弟は)『消したらあかん』って言うけど、テレビ見るからあかん。食べてからつけたら、まんが終わってて『ワーン、終わってるー！』と言うから、『おまえが悪いんや』と言うと、『ワーン、おかあさーん！』と泣いて、出て行くねん。出て行ったら、秘密の基地に、前に作ってん、そこへ行くねん」

筆者「きみはどうするの？ 迎えに行くの？」

K「うん」

…と、以後弟の話題が続く。

ごちそうさまをする時になると、急いで牛乳を飲みほし、お盆を返しに行く。

問題行動：S先生につけていただいた記録によると、この1カ月間の大きなパニックは7回。その中から特徴的な4例を挙げます。

(パニック1) Aさんがゲームを持ってきた。Kくんも含めて5～6人の児童がそれで遊んでいた。そこへBさんが「入れて」と言ってきた。Aさんは「いいよ」と答えたが、Kくんが「あかん」と言い、入れなかった。BさんはKくんのそばで見ていたが、そのうちKくんの背中に乗っかるような格好になった。それでKくんはカッとなり、Bさんをなぐったり蹴ったりした。

他の児童が職員室へ担任を呼びに来る。先生が教室へ行くと、Bさんは泣きながら箒で掃除をしていた。Kくんは後ろからBさんを蹴り続けていた。なんの抵抗もせずに泣いている子に。暴なことをしていたので、担任が厳しく注意すると教室を飛び出して、どこかへ行ってしまった。校門を出て100メートルのところにいるのを、捜しに出た先生に見つけられた。

(パニック2) 給食時。担任があまったおかずをおかわりしたい児童に分けていた。Kくんも「ほしい」と言っておわんを持って来ようとした。

その時、Kくんの手がすべっておかずがこぼれた。担任はすぐ代わりのおわんにおかずを入れて渡したが、Kくんはすねて床の上に座り込み、パンやおかずを投げて怒り出した。

「誰かがぼくの机を押したから、ぼくの手がすべった」とKくんは言うが、その時は近くに児童はいなかった。

(パニック3) Cくんの持ってきた図鑑をDくんが見ていた。そばで4～5人の男子がいっしょに見ていた。そこへKくんが行き、「ぼくに見せて」と言って図鑑を取ろうとしたが、Dくんが渡さなかった。Kくんはカッとなり、「Dのバカやろう！」と叫びながら机や椅子を次々と倒していった。バケツやちりとりを投げ、あたりの物を蹴飛ばして暴れた。担任は出張中で、隣の組の先生がかけつけて注意し、机をもとにもどすように指導するが、Kくんは受けつけない。先生が叱ると、Kくんは「どこかへ行ってやる!」「もう自殺してやる!」と言って泣きわめいた。

(パニック4) 水泳の授業前、教室で着替えをしていた時。Eくんが腰にバスタオルを巻こうとした時、タオルがKくんにあたった。Eくんは何度も謝ったが、KくんはEくんをタオルで叩き返し、さらにEくんの腹部をなぐったり顔や背中をひっかいた。ひどい傷ができ、Eくんはその日プールに入れなかった。Eくんは反撃せずやられるままになっていた。

Kくんは母親には「Eくん蹴られたから」と報告していた。

#1 (7月24日) S先生に来所していただいて、話し合いをしました。

子どもの問題行動に対処するには、まず、問題行動の目的・その子の誤った信念を見きわめることが必要です。子どもの理解のし方、相談の方針などをわかりやすくするため、初回の話の流れを対話形式にしてみました。

…先生との関係の持ち方について…

S先生「1学期が終わって、やっと、ここへ来ることができました」

筆者「お疲れさまでした。トラブル続きだったので、休みに入ってほっとなさったでしょう」

S先生「早く話し合う時間を取りたかったのですが、毎日がたいへんで気持ちにゆとりがなくて。

私が教室をあけると、なにか起こるものですから」

筆者「そうですね。先生の記録を見せていただくと、先生のいらっしゃらない時に起こることが多いですね」

S先生「私が教室にいる時は止めることができるのですが、私がいないときに限ってひどいトラブルが起きるんです。私にはよく話しかけてきてくれます。1対1で個人指導をすると勉強してくれるので、放課後に見てあげたりします。終わってもなかなか家に帰りたがらないんです。学校へは休まず来ます。学校が好きで、『友だちをけがさせるんだったら学校へ行くな!』と親に叱られるとKくんはいやがるのだそうです」

筆者「毎日、学校にきてくれるのはうれしいことですね」

S先生「そうなんです。とにかく大人とは話をするのが好きで、怒られることがあっても、相手をしてくれる先生なら誰とでも話したがりです。私が他の子に話しかけてもKくんが返事をするんです。他の子に用事を頼むと、Kくんが横から取り上げてその用事をしてしまいます。授業中、『ぼくが手をあげてるのに当ててくれない』と言って怒るんです」

筆者「積極的に目立とうとすることは悪いことではありませんが、”常に誰よりも1番でなければ”というのは困りますね。これがトラブルをつくり出すのです。Kくんは先生から1番注目されることによって、クラスの子どもたちの上に立とうとしているように見えます」

S先生「そうなんですか？親の愛情が足りないので話を聞いてくれる大人を求めているんじゃないでしょうか。そう思って、できるだけKくんの話聞いてあげるようにしていたんですが」

筆者「そうしていると、Kくんは満足して友だちにもやさしくなりますか？」

S先生「いいえ。私がいつでもKくんに向いていることをますます要求するようですよ、そうならないときにトラブルが起きるようです。彼が話をしてくれるのはうれしいんですが、Kくんが満足するように彼だけを相手にするわけにはいきません」

…友だちとの問題解決の方法について…

筆者「ですから、Kくんの場合はそう考えない方がいいと思います。彼が起こすトラブルには2種類あります。ひとつは友だちとの関係で起きています。友だちが彼の要求を拒んだり、彼が身体に直接攻撃をしかけられたと感じることが引き金になっています。Kくんは相手が自分に従わないとカッとなるのです。友だちに悪気がなく、はずみでバスタオルがあたっただけでもカッとなり、仕返しをしています。他人の身体を傷つけてしまう子どもは、その子自身が痛めつけられた体験をしている場合があります。

身体に触れられることを他者からの攻撃と受けとめてしまう程、この子が特別な反応を起こすことを理解してやらなければなりません」

S先生「むずかしいですねえ。Kくんは友だちをはがいじめにしたり、女の子をこそばしたりするんです。相手の子がいやがって、少しでも彼の手を払いのけたりしようものなら、Kくんは怒り出してたいへんなことになるのです。それでは一方的すぎて自分勝手だと思うんですが」

筆者「そうですね。Kくんは遊び相手を求めているようですが、その方法が適切ではないので友だちにいやがられる結果になってしまっています」

S先生「自分の要求を力づくで通そうとしていたら、仲良くなることはできませんね」

…家庭でのKくんの立場と役割…

筆者「Kくと給食を食べながら話したんですが、彼の考え方を理解する多くの情報を得ることができます。私なりに想像したことは、家庭では両親が権力をもつ人であり、彼は準権力者ではないかということです。＜留守番＞の話がありました。母親の留守にはKくんは親の代行をし、弟の面倒を見るという役割を果たしています。4年生の子が幼児の面倒を見るのは、けっしてたやすい仕事ではありません。入浴のエピソードは＜権力者がいる時にはどうするか＞という話です。この話からは、”弟は幼くて親に無理を言うが、ぼくはいい子でいよう”という信念が推量できます。まさに、兄らしく行動しているのです。彼に聞いたところでは、両親が働いていることによって家庭は裕福だとKくんは考えていて、誇らしくさえ感じているようでした。Kくんは今のところ両親にはかなわないと思っているのではないのでしょうか？」

これらの点から、親が家庭内で見るとKくんは、外から言われるほど悪くはないかもしれません」

S先生「それで親は困らないのですね。母親は『家では物を投げたりしない』と言われますが、Kくんは『家でも物を投げる』『叩かれるので逃げ回った』などと言います。ある時、Kくんが友だちをけがさせたとことを連絡し、家での様子を尋ねると、母親に『うちの教育方針がいけないとおっしゃるのですか！』と言われたことがあります。私はそういうつもりではなかったのですが」

…学校で学んでもらいたいことについて…

筆者「今のところ、保護者に協力していただくことは難しいようですね。彼の弟への対応から考えると、Kくんから見た世の中は絶対服従の原理であり、問題は自分が支配者になりうるかどうかにあるようです。先生のおられない時にトラブルが多いのは、先生のいないときに自分がボスであろうとするが、クラスメートは先生ほどには彼の相手になってはくれないからでしょう。Kくんが家庭で身につけた方法では同年令の友だち関係をやっていけなくなっています。この点で彼には援助が必要です。家庭の協力がなくても、この仕事は学校でこそやっていかななくてはなりません。彼が友だちを作ることができるかどうかはたいへん大きな課題です」

S先生「愛情不足というよりも、他の子どもよりも常に上にいて相手を自分の支配下におこうとするやり方に問題があるのですね。友だちと競うのではなく、対等で友好的な関係を学ばなくてはいけないのですね」

…課題にたいする姿勢について…

筆者「対応を考える前に、トラブルのもうひとつの種類について考えておきましょう。彼自身の課題にたいする姿勢に関するものです。給食の時のパニック（例2）がそれにあたるでしょう」

S先生「ああ、あれですか。Kくんは『友だちがれを動かしたからこぼれた』と言いましたが、私の見ていた限りではそういうことはなかったように思うのです」

筆者「Kくんは失敗を恐れているように見えます。もし、友だちのせいでないとしたら、どうなるでしょう？」

S先生「彼自身の不注意のためとなりますね」

筆者「そうすると、Kくんにはどんな困ることが起こるでしょう？」

S先生「そうですねえ…、叱られると思ったかな？」

筆者「その可能性が高いでしょう。あるいは、失敗を指摘され恥かしい思いをすると考えたかもしれません。つまり、クラスの中での評価が下がることとなります。学業面では、自分の得意な算数では積極的に発表するが苦手な教科には手をだそうとしないところがありますね」

S先生「ええ。ですから、教科によって成績にひらきがあります」

筆者「失敗しそうな課題や失敗を指摘され罰せられることを避けるためにトラブルを起こしている場合もあると思うのです。着席しないのは、ひとつは先生に注目されたり、他児より自分の方が特権的な立場にあることをアピールするためと考えることもできますが、もうひとつは、そうやって苦手なことを避けようとしている可能性もありますね。彼はとても臆病です。

彼は自分に課せられた責任や課題に取り組む勇気をくじかれているようです」

S先生「Kくんに不足しているものは勇気なんですね」

筆者「そうです！彼にはたくさんの勇気づけが必要です。決して無理強いしたり、罰したりしてはいけません。それから彼は”責任”についても学ばなくてはなりません」

…対策について（1）…

S先生「では、どうすればいいのでしょうか？」

筆者「まず、席につくように何度も注意するのをやめてみましょう。なんとかして座らせようとすると、不適切な方法で先生の注目を引こうとするのを強化することになります。それよりも、Kくんが席についている時や、学習しようとしている児童に先生に関心を向けてください。Kくんが自発的に学習をしてくれたら、『いっしょに勉強ができてうれしいわ』などと言ってみてください。その時のKくんの反応も見ておいてください。立ち歩いたり床に座ったまま発言しようとしたら、『あなたの意見を聞きたいと思うのですが、先に席についていただけませんか？』と丁寧をお願いしてみてください。クラスの児童とトラブルなく過ごせた時にも注目するようにしてください」

…対策について（2）…

S先生「パニックの時はどうしましょう？」

筆者「けがをさせる程のは先生のいらっしゃらない時に起こるようですから、問題はその時ですね。Kくんが怒り出したら、被害に遭う児童はなんとしても自分で身を守ることです。蹴られながら掃除をする必要はないでしょうか？先生が来てくれるのを待つ間にも逃げた方が賢明ではないでしょうか？」

S先生「逃げてもしつこく追いかけるので、それは子どもたちには難しいかもしれません…」

筆者「では、先生が飛んで行かれるまで、今まで通りということになりますね。そうすると、できることは、同様のトラブルを避ける方法をクラスで考えてみることです。Kくんを変えようとするのではなく、Kくんのような子がいて、しかも他の児童が安全に過ごせるにはどうすればいいかを工夫するのです。先ほどお話したように、Kくんは身体に触れられることに敏感なようですから、彼の身体を大切にしていあげるといった視点が必要です」

…話し合いによる問題解決について…

S先生「具体的にはどういう方法があるのでしょうか？」

筆者「例として、バスタオル事件を考えてみましょう。みんなで話し合いをするのです。次のよ

うに言うてみてください。『Eくんがひっかかれ傷を受けてしまいました。友だちを傷つけてしまって、Kくんも決して気分よくはないと私は思います。Kくんが言うには、バスタオルが当たったのがとてもいやだったそうです。そんなことくらいと思う人もいるでしょう。けれども、人間にはいろいろな感じ方があって、みんな同じではありません。先生はKくんにもいやな思いをしないで着替えてもらいたいし、みんなにも、突然Kくんが怒り出してびっくりするとかプールに入れなくなるということが起こらなくて済むようにしたいのです。どうしたらいいか、みんなで考えてみませんか？』

S先生「子どもたちから意見が出なかったらどうでしょう？」

筆者「先生が提案してみてください。『例えば、Kくんにはバスタオルが当たらないような場所をとってあげるといのはどうでしょう？ そうすれば、みんなもKくんには当たらないように気をつけやすいと思うし、Kくんにも気持ちよく着替えてもらえるのではないかしら？』と聞いてみてはどうでしょう？」

S先生「Kくんがいいと言っても、他の子が同意しなかったらどうでしょう？」

筆者「そうしたら、Kくんの好きな他の場所、例えば、保健室などを使わせてもらうというような提案もできるでしょう。それなら、他の児童の協力がなくてもできるでしょう。このような話し合いはすぐにはうまくいかないかもしれませんが。大切なことは、Kくとクラスの子どもが折り合いをつけられる方法を捜し出す筋道を子どもたちに知らせることです。また、Kくんのことを先生がどう考えているかを、Kくん自身とクラスの子どもたちに伝えることもできます。こうして話し合いで決めたことを試してみて、うまくいったかどうかをまた話し合えばいいと思うのです。話し合わずに、『Kくんは暴れるから、みんなと一緒に着替えることはできませんよ！』と一方的に言われるとKくんはどう感じるでしょう？」

S先生「罰せられて、クラスから排除されたように感じるかもしれませんね。クラスの子もたちのKくんを見る目もずいぶん違ってくるでしょうね」

筆者「もうひとつは、Kくんが友だちのいやがることをやめるように話し合う方法がありますが、もう少し先でないといは無理でしょう」

S先生「では、2学期から試してみます」

2 (10月3日) S先生にその後の様子を伺いました。

先生が試みられたこと、Kくんの変化、筆者の感想・提案は次のようでした。

1、学習態度に関して。

試みたこと：Kくんが床に寝ていても、他児に迷惑でない限り注意しないようにした。

その結果：はじめは、注目が来なくなったので席につくことが多くなった。

しばらくすると、元の状態にもどり、最近では授業を邪魔するようになり困っている。

教師に授業中も話しかけてくる。無視し続けると、前にきて机を叩いたり、それでもかまわないうでいると、先生の机の物をさわりに行くので制止せざるを得なくなってしまう。

運動は好きで、体育大会の練習は進んでやっている。

コメント：不適切な行動をしなくなると、それによって得ていた注目が減少します。その分、適切な行動（あたりまえの行動）に注目してください。しばらくは面倒ですが、彼が以前得てい

た注目の総量を減らさないように気をつけなければなりません。そうしないと、なんとしても注目を引き出そうとするため問題行動がエスカレートします。

2、パニックに関して。

試みたこと：暴れても、以前より少しでも改善した部分をさがして認めるようにした。

その結果：友だちをけがをさせるほどの攻撃は減少しつつある。

怒って物を投げることはあるが、投げ方が変わってきた。自分の物も人の物も見さかいなく投げていたのが、自分のランドセルを廊下に投げるだけになってきた。

コメント：友だちに危害を及ぼさなくなってきたのはとてもよい傾向です。行動は段階的に改善するものです。今後とも、少しずつ変化していく部分を認め、Kさんとクラスの子どもたちに伝えてください。

3、けがに関して。

試みたこと：「けがをさせたことをお母さんに自分で話しますか、それとも私から家庭連絡をする方がいいですか？」とKさんに尋ね、Kさんに選択してもらうようにした。

Kさんにけがした子どもと保健室へ行かせ、状況を説明させる。

その結果：けがをさせたことを自分で母親に正確に伝えることができるようになる。

コメント：責任について学ぶチャンスを与えることが必要です。けがをさせた時、叱るよりも事後処理について話し合われたのはよい方法だと思います。先生とKさんが話し合える関係ができていけば、次にはクラス内の問題も話し合いによって扱えるようになるでしょう。

3（12月4日）学校訪問し、行動観察と先生との話し合いをしました。

1、最近の変化

授業を邪魔することは減少。パニックも減少。怒ると手を振りあげるが、叩かない。

以前はカッとなると表情が著しく変化したが、最近は怒っていても表情がやわらかくなった。

パニックが起こってもほんの1分ほどで話ができる状態になる。以前は落ちつくまでに1時間必要だった。

2、試みたこと。

11月中旬、「Kくんが首を締めにくる、離してくれない」と児童が訴えてきたのをきっかけに、学級会で話し合いをした。

S先生「Kくんが友だちにしていることで、みんながいやだったり恐がったりしていることがあるようなんだけど、友だちが黙ってる方がいいですか？それとも、はっきり言ってもらった方がいいですか？」

Kくん「はっきり言われる方がいい」

S先生「では、Kくんのしていることで、いやだと思っていることを言ってみてください」

児童はKくんの困った行動をいくつか発言する。

S先生「これらのKくんの行動について、先生は、『お友だちになりたい』『みんなと一緒に遊びたい』というKくんの気持ちの表われだと思えます。もし、Kくんがこういう行動をやめてくれたら、みんなはKくんと遊ぼうと思いますか？」

児童は同意する。

S先生「Kくんはどうか？Kくんがこれらのことをやめてくれたら、一緒に遊びたいと言ってくれてるんだけど…」

Kくん「やめるようにする」

その後、やめてほしい行動が全くなくなったとは言えないが、確かに減少する。それと呼応するように、Kくんは友だちとドッジボールをするようになる。

3、筆者が観察したクラスの様子。

Kくんは立ち歩くが、授業の妨害や他児の学習に支障をきたすような行動はない。クラス全体は先生の話を聞くことができ、作業もよくやっている。

チャイムになると、Kくんは待ちかねたように「終わった、終わった…」とつぶやきながら、手を打つ。先生が「次はテストをします」と子どもたちに知らせると、Kくんは「なんのテストやる？先生に聞いてこよう」と教卓のところへ行き、先生に質問する。先生が「理科のテストよ」と返事をする、Kくんは「理科のテストやてー」とクラスメートに知らせる。

先生が子どもたちに「外で遊んでおいで」と言うと、Kくんは「ドッジボールしよう」と友だちに声をかける。友だちは先生を囲んで教卓のところを離れない。Kくんはカッと成る様子もなく、ボールを持って友だちのそばにいる。先生が再度「20分休憩だから、元気な子は外で遊びましょう」と言うと、一人の男子が「えっ！20分休憩なん？知らなかった…」と言う。Kくんがすかさず、「ドッジボールしよう」と誘い、3人ほどで連れだって教室を出ていく。

休憩時間が終わると、Kくんは友だちと教室にもどってきて、「疲れたー」と床に座り込む。先生に促されて席につき、テストを受ける。Kくんも含めてクラス全体は静かにテストに取り組んでいる。S先生と筆者が廊下に出ても、Kくんは机に向かいテストに集中している。

(この日、相談開始時点の問題はほぼ解決されたことをS先生と確認しました。)

事例2：腹を立てると暴れる。火遊びをするYくん(小学校6年生男子)

#1 (12月23日) H先生が相談のため来所。先生よりのお話しは次のようでした。

問題行動：2学期に火遊びが顕著になる。学校のトイレでトイレットペーパーを燃やす。理科準備室でマッチをすって遊ぶ、等。3年生のころから火遊びがあった。3、4年生頃、ライターや花火の万引が数回あったらしい。

学力：低学力のため、3年より養護学級入級の話が出ていたが、親が同意しなかった。6年より算数・国語のみ養護学級で学習している。

今までの指導方針：このクラスを担当した時、Yくんは気に入らないことがあると、友だちを蹴ったり、暴れたりしていた。Yくんにたいして、「暴力はいけない」「いやなことがあったら、蹴ったりしないで先生に言いに来なさい」と指導した。クラスメートにはYくんの気持ちを理解し、友だちとして受け入れるように指導してきた。その結果、クラス内で暴れることは減少したし、Yくんをばかにしたりすることも減ってきた。ところが、2学期になって火遊びがひどくなったので、今後の指導について相談しようと考えた。

友だち関係：Yくんはクラスのリーダー格のSくんの言うことにはよく従う。Sくんたちのグループに入れてもらいたがる。例えば、下校時「Sくんと一緒に帰ってくれない」と担任に訴えにくる。

ミニ4駆が流行した時期にはYくんも友だちといっしょに遊んでいた。その頃は問題行動がなかったように思う。しかし、Yくんの楽しめる遊びを見つけるのはむずかしく、同年令の子どもとは遊びになりにくい。

低学年児童とのトラブル：低学年の児童とけんかした時、Yくんは「ばかにされた！復讐してやる！！」と叫んだりした。このけんかとトイレットペーパーを燃やした事件とは関係があるように思われる。低学年の児童にたいしてYくんが命令的な言い方をするので、言われた児童が反発し、それでけんかになることが多い。

その他：気分のむらがある。登校時から顔色悪く落込んでいる日がある。元気なときはよくしゃべる。給食時間中も動き回る。自分が話したいことがあると、席を立てて話しくる。歴史が好き。もの知りな面もあり、みんなが驚くと得意になって教えてくれる。

家族：母親は、Yくんが外へ行くと悪いことをするからと、ビデオをみせたりして家の中につなぎ止めておこうとしているように見える。4年生の弟がいて、活発で学力も中くらいである。母親は弟の方に期待をかけているのではないかと、子どものことを相談するところがあると紹介したが、あまり乗り気でなさそうだった。

筆者より相談の方針について、次の3点を提案しました。

1、問題行動を対人関係の中でとらえてみましょう。

Yくんが問題行動をすると、だれがどんなふうに対応し、その結果Yくんにどんな結末が起こっているのかを観察します。その中から、行動のパターンや誤った信念を推量することができます。

つぎに、問題行動に代わる建設的なやり方をYくんに学んでもらえるような手だてを考えていきましょう。

2、友人関係に注目してみましょう。

Yくんが暴力に訴えないようにと指導してこられたのはとてもよかったですと思います。言葉で訴えることによって状況が改善されると子どもが思ってくれるのは今後とも必要なことです。

級友から受け入れられ援助される関係だけではなく、Yくん自身の努力が反映される相互的な関係があるかどうか見てみたいと思います。あと3カ月ほどで中学校に進学しますが、そこでは、教師の保護・指導のもとで問題を解決するだけではなく、Yくん自身で対人関係上の問題を解決

授業中	[行動観察]	(筆者の推量・感想)
<p>Yくんは先生の問いかけに挙手し、発言したがる。</p> <p>↓</p> <p>2の発言。先に発言した級友と似た応答をする。</p> <p>↓</p> <p>先生「また、〇〇くんの真似か・・・」とつぶやく。</p> <p>↓</p> <p>「〇〇くんとは5年間いっしょやから、わかるねん」と言いながら着席する。</p> <p>↓</p> <p>「〇〇の真似して」「わからなかったら、言うな」などと、Pくんたち一部の男子より攻撃がくる。</p> <p>↓</p> <p>その後は、机にうつ伏している。</p> <p>↓</p> <p>授業の合間に先生はYくんの顔をのぞき込んで声をかけ、学習を促す。</p>	<p>(明るくて、積極的だなあ)</p> <p>(とにかく目立ちたいんだな)</p> <p>(Yくんと競合する子がいるんだ)</p> <p>(あれ？意気消沈したのかな)</p>	
<p>給食準備時間</p>	<p>Yくんは所在なさそうにウロウロしている。</p> <p>↓</p> <p>先生の机の横の物の整理をする。</p> <p>↓</p> <p>先生に話しかける。</p> <p>↓</p> <p>男子数人が将棋の駒を使ってドミノをしているのをそばで見る。</p> <p>↓</p> <p>歴史の本を学級文庫より持ってきて席について読む。</p>	<p>(用事をするのが好きそうだな)</p> <p>(先生が好きなんだなあ)</p> <p>(自分で楽しみを見つけるのも大切だね)</p>

していける力がより必要となるでしょう。

3、家庭の協力がなくても、学校で起こる問題行動は先生の対応で改善することができます。

母親が相談を積極的に希望しないなら、先生と筆者との話し合いに母親にオブザーバーとして同席してもらうというのはどうでしょうか？ 家庭での状況を聞くこともできますし、母親を勇気づけることもできます。先生の対応から母親が学ばれることもあると思います。

2 (1月 19 日) 学校訪問し、行動観察の後、担任H先生、養護学級担当M先生と話し合いました。

給食

歌謡曲風の音楽が流れると、Yくんは前へ出てしなをつくりながら、2フレーズ歌う。

↓

「もう、のせんといてや…拍手せんといてや…」と、照れながらもうれしそうに席にもどる。

↓

やりかけのドミノが気になるのか、席を立つ男子がいる。

↓

Yくんも席を立ち、前へ出て行く。先生に向かって「せんせー、あんなことしてる子がいてー」と得意げに大きな声で叫ぶ。

↓

先生「席にもどりなさい」とドミノの男子に言う。言われた児童は席にもどる。

↓

Yくんも満足そうに席にもどる。

↓

[このようなやりとりが2、3回繰り返される]

(ひょうきんな子だなあ)

(Yくんだって立ってたよ)

(先生と話がしたいのかな)
(言いつけると自分がえらくなった気分がするのかな)

(先生の知らないことを教え、先生を動かせるYくんは先生より力があることになるなあ)

(級友はYくんのやり方をどう感じるかしら)

(先生のいない所ではどうなるのかな?)

休み時間

先生が教室を出られると、先生の椅子にYくんがすわる。

↓

セロテープをまぶたにはりつけ、女子におどけて見せる。女子は「気持ちわるー」と笑う。

↓

所在なくウロウロ。

(先生にあこがれているのかな)
(先生気分?)
(先生みたいに慕わりたい?)

(遊び相手がいないのかなあ)

1、行動観察 (別表参照)

2、H先生との話し合い

(1) 観察より推測したY君の信念・行動の特徴

●目立っていたい。一目おかれたい。●先生に友だちの間違いを知らせて、注意してもらおう。「上の人の忠告には従うべきだ。上の人は人の間違いを指導するものだ。」

「自分の手に負えない相手に対しては、力のある人に知らせて指導してもらおう。」「自分が上
のときは、上の人らしくえらそうにしてもよい。

●いつもぼくは間違いを指摘されたりばかにされたりするが、友だちの間違いを指摘することで
名誉挽回できる。あるいは、友だちにたいして優位に立てる。

(2) 問題点

Yくんの告げ口はクラスの指導者である教師の力を発動させている。担任を動かす力を持つこ
とによって間接的にYくんがクラスメートにたいして優位に立つ結果となる。

この結果は、一時的にはYくんを満足させるかもしれないが、友だちの欠点や失敗を指摘する
やり方では、友だちからは好かれない。そのため、友だちから認められたいという願望を満たす
ことはできない。指導力のある大人がいない時には、Yくんは無力で仲間から相手にされなくな
るのではないか。

Yくんが低学年の児童との間でトラブルを起こしやすいのも、これらの信念と関係しているよ
うに思われる。

(3) 告げ口への対策

Yくんが積極的に意見を言おう、あるいは先生の役に立とうとするのは大切にしたいです。で
すから、まず「教えてくれてありがとう」と言ってから、つぎの3つの対応を試みてください。
(次回までYくんの訴えの内容をメモしておいてください。)

(a) みんなで話し合うべき問題の場合。

(例えば、給食時間に立ち歩く児童がいたらどうしたらいいか?)
クラス内のルール作りとして改めてクラス全体で話し合いをする。

(b) 他の児童の個人的な課題で、先生の責任で対処すべき問題の場合。

(例えば、「〇〇さんがノートを書いていない」と指摘する)
「そのことは先生にまかせてほしいな」と応答する。

(c) 先生への報告の”内容”を変えてもらうように働きかけてみる。

「友だちにしてもらってうれしかったことや友だちのよいところを見つけたときにも教えてく
れるとうれしいな」

3、M先生(養護学級でのKくんの担当)への助言。

ほかの児童と自分を比べるのではなく、Yくんが自分なりの目標に向かって努力することがで
きるように。

ほかの児童の間違いを指摘するのではなく、援助できる関係へ。

例えば、「ここの部屋でお勉強するときには、先生はこんなふうにしてほしいと思っているの
よ。Yくんにも協力してもらえるとうれしいんだけどな」と言って、具体的に言い方を説明する。
例えば「友だちの間違いに気がいたら、先生に小さな声で教えてね」など。

#3(2月2日)学校訪問し、H先生、M先生と話し合いました。この日、母親が来校し、話し
合いに参加しました。

1、先生がメモされたYくんからの訴えを見ると、次の3種類に分類することができます。

(a) Yくん個人の課題

例1：ある男子が捨て犬を世話しながら、飼ってくれる人を捜していた。

「ぼくに犬を見せてくれない。先生、言うてや」と言ってきた。

例2：下校時、「Sくんが一緒に帰ってくれない」と訴える。

(b) クラスのルールに関係するもの

例3：将棋クラブの駒をクラスで預かっている。

雨の日は使ってもよいことになっている。晴れの日やのに将棋の駒、使ってる」と訴えに来る。

(c) ほかの人の個人的な事柄であって、問題とする必要のないもの。

例4：女子2人が連絡帳を交換して書いていた。

「せんせー、連絡帳交換して書いてるでー」

2、それぞれについて、対応案を考える。

a) 友だちとなかよくやっていくには、Yくん自身にできることはないかを話し合う。

例：「Sくんが一緒に帰ってくれない」

方法：下校時に先生からYくんに声をかけ、その日の帰宅の方法を相談する。Sくんたちは「一緒に帰るのはいいが、途中で道草して遊ぶので困る」と訴える。

Yくんは、途中で遊ばなくてもSくんたちと帰りたいかどうかを確認する。翌日、双方に約束が実行されたかどうか尋ねる。

Yくんとその日の帰り方を相談する。

(b) 相手が聞き入れやすい言い方をYくんに教え、実践してもらおう。

Yくんがうまく注意できた時を見つけて、Yくん自身に適切な言い方を意識づける。

駒の件では、先生が「注意してあげて」とYくんに言うと、Yくんはやさしく注意することができた。その結果、相手も素直に従った。

(c) そもそも問題はない。誰かの迷惑になっている行動ではないので注意する必要のないことをYくんに説明する。

3、母親への働きかけ。

これまでの担任の先生との相談の方針を概略説明し、家庭でのYくんの様子（特に4年生の弟との関係について）を伺う。

「Yくんを勇気づけるように家庭でも協力をいただけるとありがたい。＜叱らない、ほめない育児法＞を試していただけないか」と筆者よりお願いする。(母親は同意してくださり、3月中旬まで当研究所にて面接を4回行ないました。保護者との面接については、稿を改めて報告したいと思います。)

4 (3月2日) H先生に来所していただいて話し合いをしました。

1、下校時の取り組みの結果。

- Sくと帰ることにこだわらなくなる。
- 一緒に帰る友だちが変わる。
- 一人で帰ることをいやがらなくなる。
- 放課後のスケジュールに応じて帰宅する。

「今日はスイミングやから、はよ帰らんとあかん」と急いで下校する。

- 先生が「今日はどうするんや?」と聞くと、Yくんの方から「ぼく、もういいよ」と言うようになり、取り組みの必要がなくなった。

2、3学期の変化。

- 登校時から顔色・表情がよい。気分のむらがなく、安定している。
- 2月の中ごろより、友人関係が変化する。友だちの家へ遊びに行くようになる。以前はYくんから出向くことはなかった。リーダー格のSくんたちのグループに入れてもらいたがったが、最近では自分から友だちを選んで対等な感じで遊んでいる。

　　告げ口がなくなる。

- 担任に直接自分の希望を言ったり、自分のことを話題にして積極的に関わりを求めるようになる。「先生、将棋しよう」と誘う。「今日、〇〇くんどこへ遊びに行くねん」などと楽しい報告をする、等。
- M先生と落ちついて学習できる。意欲的。卒業文集の作文もYくんなりに考え、がんばってしっかり書けた。
- 火遊び、トラブルはなくなった。

5 (3月23日) 母親、H先生、筆者の三者で話し合いをしました。

母親が試みたことと家庭での変化、先生が取り組んだことと学校での変化を連絡しあい、Yくんの成長を確認し、相談を終了する。

家庭での変化：

- 弟とのけんかが減り、二人にまかせると話し合っ問題解決するようになる。
- 急にすねて怒ることがよくあったが、不満なことがあると「～してほしい」と言葉で訴えるようになる。
- 家事の手伝いを進んでしてくれるようになる。父親の仕事場へ行ったときも、自分から仕事を見つけてしてくれた。

学校での変化：

- 担任の指導がなくても、自発的にYくんを仲間に入れようとする児童がいる。

- Yくんが縄跳びに挑戦していると、クラスみんながYくんを応援し、Yくんが成功するとみんなが拍手喝采するということがあった。
- 学習面でも意欲的になり、よく伸びた。計算問題の理解がスムーズになった。
- Yくんが養護学級にいと、友だちが呼びに来るようになる。
(Yくんにたいして攻撃的だったPくんが、最近よくYくんの家に遊びに来るようになり、仲良く遊んでいると母親より聞く。PくんはYくんを呼び捨てにしない、遊んだ後もきちんと片づけてくれるなど、学校では気づかなかったPくんの変化にH先生も驚く。)

まとめ

問題行動をする子どもの指導について、先生と相談を進めた2つの事例の経過を報告いたしました。クラス内での対応を工夫する場合、筆者は以下の3つの視点を持つことが必要だと考えています。

1、問題行動の目的・誤った信念を推量します。

これを見きわめるためには、実際に問題行動が起こっている場における対人関係を観察することがとても役に立ちます。客観的に観察してみると、問題行動を持続させている要因を見つけ出すことができます。

筆者が学校を訪問するのは、問題行動の目的を推量するためだけではなく、実行可能な対策を考える上で、その場の雰囲気や状況を知ることは重要な手がかりとなるからです。

2、まず、教師が子どもを勇気づけ、よい対人関係を作るようにします。

子どもが問題行動をすると、子どもを罰してしまいがちです。罰は、子どもの敵意を増加させたり、子どもをますます臆病にし、対人関係を悪くする結果にしかありません。賞罰で子どもの行動を操作しようとするのを止め、子どもを尊敬し、勇気づけることを始めてください。

まわりの子どもたちにとっては、教師の対応は問題行動をする子どもとのつきあい方のモデルとなります。

3、最終的な目標は、クラスの中に建設的な子どもの居場所をつくることです。

クラスの中で一員として認められることは、子どもにとってとても大切なことです。子どもが大人である教師から受容され、保護されていても、それだけで友だち関係がうまくいくものではありません。子どもが自立に向かうよう援助するためには、対等で協力的な友だち関係を育てるという視点が不可欠だと筆者は考えます。

おわりに

この報告集が現場の先生方のお役に立つようにと考えて、相談の中からこれらの事例を選んでみました。家庭の協力が得られない場合でも、一定の手続きを踏みさえすれば、必ず状況は改善していきます。それを見る度に、先生方の影響力の大きさを筆者はいつも痛感しています。

最後に、相談を進めるにあたって、筆者が学校訪問することを快く承諾してくださる先生方に改めてお礼を申し上げたいと思います。

<参考文献>

F. ドルト（宮崎 康子訳）：子どもの登場するとき（みすず書房）

M. マノーニ（山口俊郎訳）：子どもの精神分析（人文書院）

野田俊作：アドラー心理学トーキングセミナー（星雲社）

野田俊作・萩昌子：クラスはよみがえる（創元社）

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載